
絶対魔剣！

ゼロごーき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

絶対魔剣！

【Nコード】

N1009Z

【作者名】

ゼロごーき

【あらすじ】

旅行に出かけたはずが、いつの間にか異世界に投げ出されていた高校生、引照は、元の世界に戻るため、成り行きでとある組織に協力することに……。

己の魔剣を手にし、いざ戦場へ！負けられない戦いがそこにある！

プロローグ1【冗談にもTPOはある】

誰かが言った、

『人間の想像できるものなら、必ず実現できる』と。

これは、人間の想像が実現した世界での話である。

とある町の外れ――――

一人の青年が目を見ました。

――（ここは……？）

彼はゆっくりと体を起こし、周りを見渡す。

（確かあの時、船に乗ってて、あれ？）

状況が理解できずただ荒れ地に佇んでいる彼はこの世界の人間ではない。正確に言うところの世界は彼の居たこちらとは別にある世界、異世界である。

彼の名は五十嵐引照《いがらしひつしょう》。今年初めて高校生になった真正正銘の一般人であり、特徴を挙げるとすれば、名前が独特だということぐらいだろう。彼の名前の由来は簡単で、両親が迷いに迷った挙句、なんか良さそうだからと近くにある寺院の名前を取っただけである。無論、無断で。

そのなんら一般人と変わりのない彼がどうしてここにいるのかという、

――（そうだ、船に乗ってたら嵐に巻き込まれて、揺れた時に頭撃つて気を失って……）

彼のかすかに痛む頭がその衝撃を思い出させたが、重要なところが出てこない。

「とりあえず町を探るか。ここにいっても腹減るだけだし」

つま先立ちしてやっと見えた遠くの建物を目指し、ゆっくりと歩きだした。建物の形がわかるぐらいに近づいたとき、引照の目に人影が写った。

「なんだ？　なんかこっちに向かって来てんな」

引照の前から数人の人影が走ってきている。よく見ると、どうやら一人が何かを背負いながら、自警団のような恰好をした二人に追いかけられているようだ。

—（泥棒かなんかか？　なんか物騒だな）

ふと気が付くと、さっきまで遠くいたはずの男たちが足音が聞こえるまでに近づいてきている。

「ッ！　ラッキー、こんなところに人が！」

追いかけられている男が大きな声で素晴らしいながら、まるで狩人のように引照へ近づいてくる。

「え、ちょ、まっ」

引照は予想外の出来事に反応できず、後ろに回り込まれてしまった。

「それ以上近づくな！　こいつがどうなってもいいのか！」

そう叫んだ男の手にはいつの間にか剣が握られ、引照の首筋に突き付けられており、それに反応するように、追いかけてきた二人が足を止める。

事態がどんどん進んでいく中、引照の思考は完全に停止していた。焦りに焦った頭で、どうやってこの場を抜け出すかを考えてみる。しかし上手くいきそうな解決策が見当たらない。引照が頭をフル稼働していると、追いかけてきたうちの緑髪の青年が呆れたように話し始めた。

「おいおい、何してんだ？　んなことしてもどうせ捕まるから今のうち降参しとけて。大体お前みたいな小物に構ってられるほどこっちは暇じゃねえんだよ。まだ抵抗するなら実力行使にうつるぜ？」

一瞬、時が止まったかのように場の空気が固まる。こういう時、誰でも相手を刺激しないように注意を払うはずだ。それなのにこの男は、武器を持つ相手に対して完全に挑発している。

「なんだとこの野郎！　やれるもんならやってみやがれ！　こいつがどうなっても知らんがな！」

こうなることは誰もが予想できたであろう。『窮鼠、猫を噛む』という言葉があるように、追い詰められた人は何を仕出かすかわからない。時には人を殺すことも躊躇しないだろう。引照は手にかいた嫌な汗をズボンで拭い取り、荒くなつた息を整えて冷静に状況を整理しようとするが、ただ心臓の鼓動が体を響き渡るだけだった。そうしているうちに、溜め息をつきながら青年が話し出す。

「へえ、そういう態度をとるんだ？　じゃあ手加減できねえな。そいつ諸共ぶった切ってやるよ」

「……は？」

もしかして本当はこいつが悪役じゃね、と思えるほどいつそ清々しい位の態度に、引照と剣を構える男の声がシンクロした。

「だから最初に言っただろ、実力行使するって。今回の目的は、dead or alive、つまり生死の関係なしにお前を捕獲することだけだから、別にお前をどうにか出来れば後はどうでもいいんだよ」

「ちょ、ちょっと待て、俺は？　一般ピーポの安全は？」

「残念ながら俺は討伐専門だから、保護とかは専門外なんだよね。俺に会ったが運の尽き、あきらめろ」

そういつてウインクをする青年は、まさに殺人鬼のように、腰に掛けてある剣を抜き取った。ゆっくりと剣を構え、大きく息を吸った後に最後の判決を下す。

「未練バリバリだろうが、ここで終わりだ」

引照はなんとか逃げようとするが、未だに剣が首筋へ向けられているため下手に身動きが取れない。もう終わりだ、そう心で呟いて死を覚悟する引照の耳には予想外の言葉が響いた。

「くらいやがれ、おっさんだけなあ！」

緑髪の男がその場で剣を振り下ろした瞬間、何が起きたのかかわらないが「うぐっ!？」というみっともない声を上げて後ろに居た男が倒れた。

ブログ1【冗談にもTPOはある】（後書き）

初投稿です。つたなく幼い文章ですいません。これから少しずつ上達していければとおもいます。

プロローグ【百回聞いても無理だと思う】

小さな町の表街道——

あの後、引照はさっきの青年たちと共に町の中を歩いていた。町は一見西洋風な感じで、道の両脇には簡易テントを立て、野菜や果物なんかを売っている。

「さあ、着いたぜ、とりあえず中に入って。話はそれからだ」
そう言われて、一同は小さな建物の中へ入っていった。

建物の中は見た目より広く、どこか豪華な感じがする。案内してくれた青年は引照を椅子に座らせ、話を始めた。

「とりあえず自己紹介をしようか。俺の名前はライン。ラインってのは、コードネームみたいなもんなんだけどね。お前は？」

「俺は引照。みんなにはインテリって呼ばれてる」

「へえ、じゃあ頭いいのか？」

「いや、そうじゃなくて、名前の漢字をそのまま読んだだけ」

「ふくん。あ、そうだ。俺のほかにもう一人居ただろ？」

「あの、全身隠してたやつ？」

「そうそう。あいつの名前はレイン。俺と双子で、俺が兄貴」

引照は数分程度ラインと話し、ついにこの世界について聞いた。

「そうだ、あのさ、この世界って……」

「ん？ ああ、そうか。あっちから来たもんな」

「えっ！ 分かったのか？」

「まあね。それも含めて説明しようか」

——数時間後

引照は頭の中で話された内容を必死に整理していた。
話された内容はこうだ。

まず、この世界は想像した通り、異世界である。更にこちらの世界は、人間が、こうあってほしい、という願望によって生み出され

た世界らしい。そのため科学の進歩はもちろんのこと、魔法のような非科学的なものもあるのだという―（それほど使われてないらしいが）。そして、この世界の特徴として挙げられるのが、先ほどライン達が使っていた、『魔剣』である。魔剣と聞くと、マイナスなイメージが浮かぶ人の方が多いだろう。しかし、この『魔剣』というのは『魔力の宿った剣』という意味であって、必ずしも呪われているようなものではないらしい。先ほど出てきたが、この世界は人間の願望が実現した世界。つまり、宗教や神話に出てくる神々なんかもすべて実在するのである。『魔剣』が出来上がったのは、次のような過程を経ている。

初めに、人間の想像によって、神々が具現化する。多少の違いはあれど、信仰によって神々の存在は保たれた。だが時がたつにつれ、様々な要因が折り重なってこちらの世界の人々の信仰心が薄れていった。つまり、人が神を必要としなくなってきたのである。当然、具現化した神々はの存在も薄れていった。このままでは自分が消滅してしまう、そう感じた神々はあることを思いついた。向こうの人間の信仰が薄れているのなら、同じ人間であるこちらの人間に信仰させられれば復活できるであろう、と。では、どうすれば信仰を集められるのか。神に対しての信仰心は十人十色であるが、代表的なのはその神の持つ能力に対しての信仰らしい。どんなに凄いやわられても、自分に何の恩恵もくれない神は、よほどのことがない限り崇拜しないであろう。では、どうすれば神の力を示すことができるのか。そこで出てきたのが武器への憑依、『魔剣』である。魔剣を通して人間に力を使ってもらい、その威力を示すことで再び信仰を集めようというのである。

しかし、これだけでは神のメリットしかない。なんの信仰心も持たない人間は、果たして神々に協力してくれるのであろうか。そこで考えられたのが、協力してくれた人間の願いをかなえるということである。力を取り戻した神にとって、人間一人の願いをかなえるなど容易である。これで、人間にとってもメリットが生まれた。

だが、一つ問題が生じた。神々は力が弱ってきているため、そのままでは力を発揮できない。そのため、神々は魔剣の使用条件として貢物、つまり代償を払うよう契約を結ぶことにした。そうしていく内に、この世界の人々は全員何かしらの魔剣を持つようになったのだという。

そのため、ラインには引照がこちらの世界の人間ではないとわかったらしい。

このようにラインから説明を受けた引照であったが、まるでつまらない歴史の授業を受けているように、聞くのは簡単だが、理解するのがとても難しく感じる。

—（なんだよこれ！ 中二の妄想設定か！ 何一つ理解できねえよ。でも、全部事実なんだよな）

頭から白い煙が上がりそうなくらいショート寸前の引照に、心配そうな声でラインが声をかけた。

「やっぱ最初はそうだよな。まあ、これはあくまで入口というか、むしろ理解しなくても大丈夫なんだけどね」

「それを先に言ってくれよ……」

「いや、でもいちいち聞かれると面倒だし」

「はいはい、そいですか」

「ということで、もうちょっと説明するぜ」

どうやらまた眠気との戦いが始まるらしいと思いながら、あきらめ半分に引照が答えた。

「どうぞ、どうせ理解できないけど」

「じゃあ、説明するぜ。まず、今まで魔剣の成り立ちから説明したんだけど、もう一つ説明しなきゃいけないことがある。実は魔剣の力を示すには、魔剣同士で戦わなくちゃならない。それが一番手っ取り早いってことなんだろうな。それで魔剣同士で戦うことになるんだが、その戦闘では不思議なことに目立つような傷が一切つかない。原理はよくわからないが、とりあえず体じゃなくて魂のほうを攻撃してるんだと。だから攻撃で直接的に傷はつかないが、痛みが

あったり、動かなくなったりする。ちなみに、ダメージは実際に傷ついた時と同じように時間がたてば薄れていくんだ」

そう聞いて、あの時後ろに居た男が不意に倒れたことを思いだした。

「ああ、だからさっきおっさんが傷一つなく倒れたのか」

「そういうこと。しかもあの時はとどめを刺したからな」

「とどめ？」

「そう。魔剣を扱うとき、まず憑依しているものと契約を結ぶ。でも、ほかの魔剣で傷つけられていく内に、契約というある種で魂の繋がりが絶たれるんだ。それによって不安定になって、気を失うってわけ。ついでに言うと、一度契約を絶たれると二度とその魔剣とは契約できなくなる。魂がもたないってのもあるし、負けるような奴に憑いていても、復活が遅れるだけだから魔剣に拒否されるってのもあるな」

「なんか複雑だな」

「いや、ようは勝てばいいだけ」

そう言っただけだが、実際はそう簡単にはいかないだろう。第一、何をしてくるかかわからない相手にぶっつけ本番で勝てというのである。

ふと、引照は自分にとって一番大事なことを思いだした。

「そうだ、どうしたら元の世界に戻れるんだ？」

「ん？ ああ、それか。それは三年後かな」

「えっ、なんで!？」

「そりやお前、あっちとこっちがつながるのが三年周期だからだよ」
まじかよ、と引照は落胆する。すぐに帰れるなんていう都合のいいことは望んでなかったが、三年というやけに現実じみた数字に軽くショックを受けた。

「ということで、お前には三年間、俺の所属する組織で活動してもらう」

「は!？ なんでだよ？」

「保護してやるんだ、それくらい我慢しろ。うちの組織は××から手が出るほど人手が欲しいんだよ」

「どんだけ欲しいんだよ！……でもまあ、やることもねえし、路上でホームレスになるよかましか」

「じゃあさっそく剣を選びに行くか」

そういつてラインは立ち上がり、武器倉庫へと引照を案内した。

プロローグ【百回聞いても無理だと思う】（後書き）

次回からはいよいよ本編がスタート！更新は遅くなりそうなので、申し訳ないです。なるべく急ぎますので、よろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1009z/>

絶対魔剣！

2011年12月3日21時56分発行